

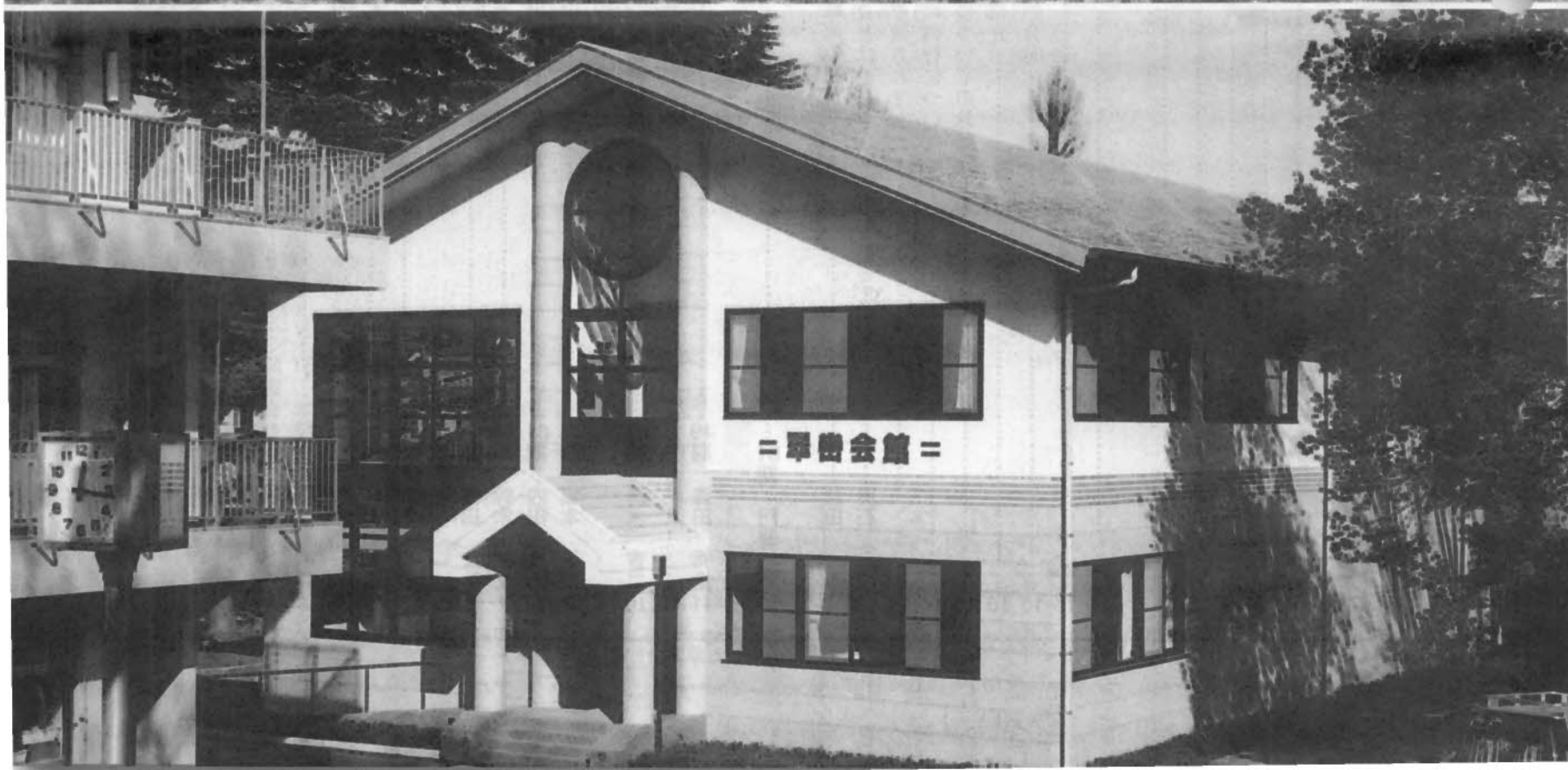
高崎高校同窓会報

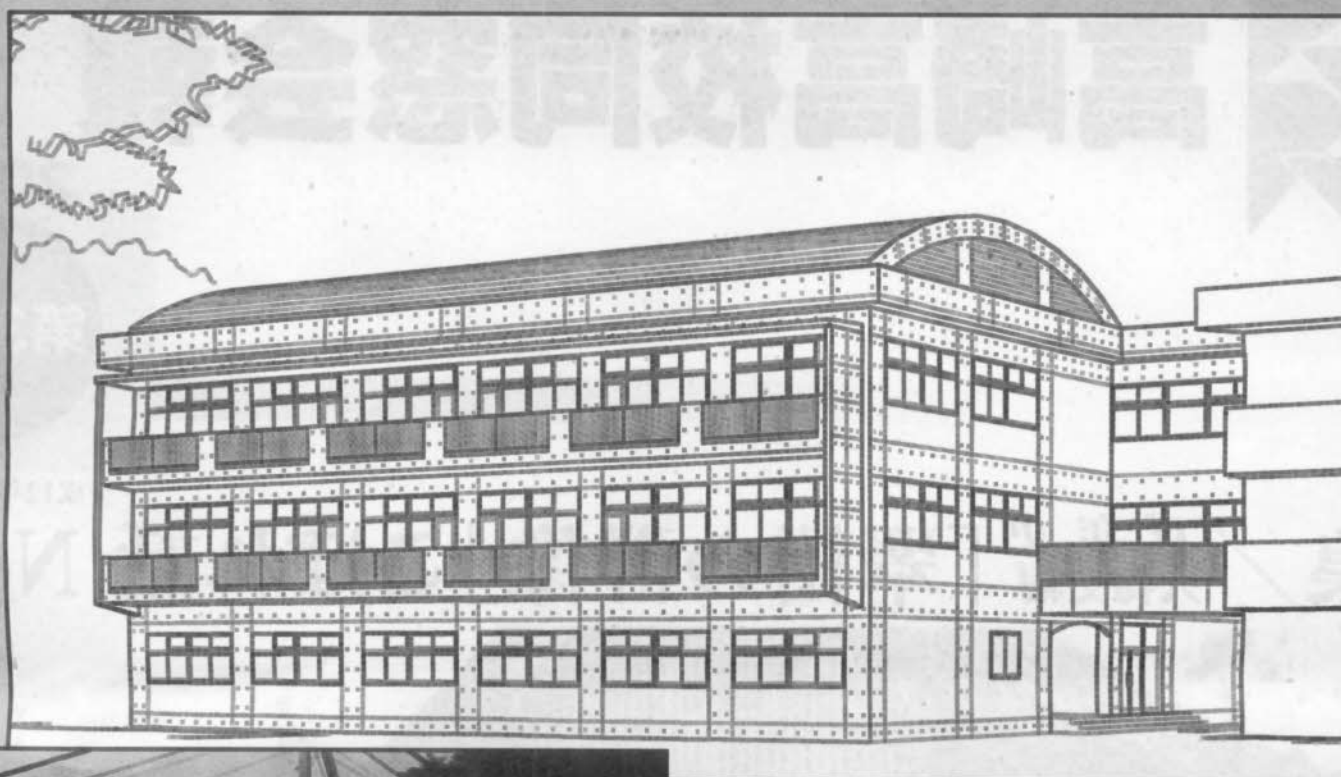
2000

第34号

平成12年11月30日

特集／百年史 人物史編「翠巒の群像」こぼれ話 No.2





平成13年3月完成予定の新理科棟



取り壊された旧理科棟

GRAPH
FILE

高高同窓会 No. 34 目次

あいさつ	同窓会会長 横田 英一 3
こあいさつ	学校長 桜井 直紀 4
もう幾つ寝ると	同窓会副会長 原 浩一郎 4
二〇世紀最大の発見は	同窓会副会長 佐藤 和徳 5
四〇年の椅子	全日制教頭 福田 賢吾 5
特別寄稿	
京浜高中四一会の集い	41期 依田 文弥 6
秀麗様名案に	51期 鈴木 武文 7
高高時代の思い出	61期 内田 欣治 8
高々時代の思い出	71期 坂本 正樹 9
特集●百年史人物史編「軍醫の群像」こぼれ話 No. 2	
岸浩初代同窓会会長の戦後の活躍	51期 清水 吉二 10
●刊行案内「高崎高校百年史」	49期 森田 秀策 11
未完の物語	81期 門傳 剛 12
論壇	
「インビジュアル」	
同窓会だより	
「吠える会」(大蔵流の狂言)	藤田 実 13
高高通信制同窓会とは	白石 三郎 13
同窓会事務局が整備されました	
同窓会会員名簿の刊行について	
維持会費の納入についてのお願	
●表彰・叙勲者紹介	14
●卒業生の作品紹介	15
●翠樹文庫	15
●翠樹セミナー	15
母校だより	
各部の活躍	
各部の活動	18-16
第五十四回定期戦	19
最近の進学状況	19
人事異動	19
同窓会会計報告	20
高崎高校同窓会ゴルフ大会会計報告	20
第99回新年総会案内	20
編集後記	20
本部幹事会	



ごあいさつ

同窓会会長 横田 英一

年末も押し迫り、二十一世紀の

曙光がほの見えてきました。同窓の諸兄におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。平素は本同窓会に格別なご協力を賜っており、感謝申し上げます。今年も各界、各方面において同窓の諸兄の目覚ましい活躍を見聞いたしました。まことに同慶の至りであります。同窓諸兄におかれましては、どうかご健康に留意され、益々ご活躍なされますようご祈念申し上げます。

本年一月の総会におきましては、私をはじめ副会長、会計監査の全員が再任されました。伝統ある高崎高等学校同窓会会長に再任される光栄に浴し、意を新たにして同窓会の発展に尽力いたしたいと存じておりますので、同窓諸兄には今後も一層のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

さて、今日、戦後の日本の復興

と躍進を支えてきた様々な仕組みが、それぞれにほころびを露わにしてくれており、学校教育においてもそれが指摘され、とりわけ青少年問題が大きな議論を呼んでおります。そのまっただ中にある高等学校教育の難しさに思いをいたしております。この難問山積の高校教育の一般的な状況下にあつて、母校高崎高校では、会報の学校状況の報告にありますように、文武両面においてすばらしい成果を上げておりますことは、まことに喜ばしく、先生方のご指導に深甚の敬意を表します。また、他校に先駆けて学校評議会を設置し、地域や各層の人々の相互理解を図り、同窓諸兄を講師とし舉辦セミナーを開催し、保護者、生徒共々研鑽に励み、さらに学校五日制に向けて、校内の人材を活用したオーブ

ンスクール構想を模索するなど、開かれた学校づくりにも全職員一丸となって意欲的に取り組む姿には頼もしさを感じております。こうした活動には大いに共感するものがあり、同窓会でも出来る限りの協力を惜しまない所存ですので、同窓諸兄におかれましては、実社会で蓄積された知識、経験をご提供下さつてご支援下さいますようお願い申し上げます。

最後に、同窓会が当面する問題

につきましまして一言申し上げます。諸兄のご理解を得たいと存じます。ご承知のとおり、同窓会は同窓諸兄にお納めいただく維持会費により運営されておりますが、その維持会費の納入状況がここ数年漸減してきております。このため予算編成およびその執行には毎年苦慮しております。こうした事情をご賢察の上、維持会費の納入につき

是非ともご協力下さいますようお願い申し上げます。

(群馬トヨタ自動車㈱代表取締役社長 五〇期)

■新役員決まる

本年度総会で、会長以下左記の役員が選出されました。任期は平成十四年度までです。

会 長	横田 英一 (五〇期) 再任
副会長	田中 順 (五一期) 再任
原 浩一郎	(五六期) 再任
佐藤 和徳	(五七期) 再任
大木 紀元	(五八期) 再任
有田 喜一	(六〇期) 再任
全日制教頭	
通信制教頭	
会計監査	石井 敬之助 (五〇期) 再任
安藤 震太郎	(五五期) 再任
松岡 光弘	(七七期) 再任



いあいさつ

学校長 桜井 直紀

同窓会報第三十四号の発刊を心からお慶び申し上げますとともに、皆様方には本校の充実・発展に多大なご支援・ご協力をいただいておりますことに、深く感謝申し上げます。おかげさまで持ちまして本校の教育活動は順調に行われており、生徒は勉強や部活動に熱心に取り組み、別途本冊子に掲載されておりますような成果を上げています。この冊子を皆様方が手にするころは、二十一世紀へと移る時期であり、本校の今までの歴史はまさに二十世紀とともにあったと言えます。この間に諸先輩が培ってきた伝統や校風は常に引き継がれ、高められ、今日の高高があると考えます。

さて、最近の生徒の様子をアンケートから見ると、本校入学の目的を進学や学力向上などの進路に関係させる者が七五%、部活動・友達に求める者が一五%等となっており、また、学校生活を送る中で本校に求めるものとして進路等に重点を置く者が三六%、人間性の育成や社会生活上の資質向上に求める者が五七%等となっています。一方で三割近くの者が高校生活に不満を持ち、その多くは勉強との関係で生じており、これらを含め越えたり、自己を見つめ直したりなどの自己変革ができにくく、責任を他のものに転換する面も見られます。また、他の

生徒を個性的・独創的な発想ができ、しっかりしていると感じている反面、公共心や思いやりに欠ける面があるとも見えます。また、勉強や部活動等で尊敬できる先生がいると思う生徒は三分の二です。本校の生徒は課題を抱えながらも多くの可能性と素晴らしさを持っていますので、課題の解決を図りつつ、将来の中心となる人材を育てるために、教職員が常に高い理想を持って指導に臨めば、二十一世紀の高高はさらに発展するものと確信しています。

次に、卒業生には思い出の多い理科棟と学芸部棟の建て替えが進行しており、新しい建物は一階が部室、二階が化学、三階が物理の教室となり、年度末には完成予定です。言うまでもなく理科教育では実験等を通じて、実物を見ての学習に大きな意義がありますので、今までの以上の機能を持つ教室とし、一層充実した理科教育を目指すこととしています。

また、学校教育を巡っては中学校と高校とを一本化した学校の設置、生徒減に伴う高校の統廃合、さらには本県独自の問題としての男女別学の問題があります。県全体の動向を踏まえながら、本校でも準備に入る時期ですので、皆様方のご理解・ご協力をお願いします。



もう幾つ寝ると

同窓会副会長 原 浩一郎

もう幾つ寝るとお正月というなつかしい童謡が思われる時期が来た。しかしその正月はほとんどの人が二度と経験しない新しい世紀の始まりである。二十世紀はいわば戦争の時代であり、そしてそれに打ち勝つ為の科学技術の開発競争を経て、人間を月に運ぶ迄の技術の発達となつて結実した。兎がお餅をついていた幻想的なあの月が裸の野原である事がテレビの画面に拡がったのであった。ある種の感動はあったが、何か空しいと感じたのは小生だけであつたらうか。今またIT革命とやらで毎日の新聞はカタカナ文字とローマ字の氾濫である。去年今年貫く棒の如きもの、という高浜虚子の句の様に淡々と二十一世紀へ時は移つて行くのであるが、次の世紀へ積み残したもの、のあまりの多さを感じるのである。

その一つに教育の改革がある。十七才の犯罪が毎日の様に報ぜられた。殺人、恐喝、集団リンチ、ハイジャック等々。何の不満の現れなのかどう考えても解らない。特定の者に対する恨みでない事は確かである。被害者はきまって通りすがりの無関係の市民であり、仲間内の弱者である。今世紀吾々は、世界に追いつけ追い越せにはある程度成功した。しかしその代償に何か大きなものを忘れてきた

のではないかと思う。そんな折、十七才の青春、という句集に出逢った。直線に出て全力の鬼やんま、横浜高校三年の大石剛君の句であるが、大岡信が朝日新聞の「折々のうた」でとり上げ、当節あまり嬉しくない話題になる事の多い十七才が、実際には生き生きとした感受性の持ち主たちであることを力強く証言している、と評している。全く同感である。こういう感性を持った少年が圧倒的に多い訳で、干天に慈雨の様な気分になった。

群馬県でも教育改革検討委員会を設置し、少子化による将来の学校の適正規模、適正配置、中高一貫校の設置、男女共学問題が検討されている。すでに平成十四年からは完全週五日制が決まっており、これから十年程かけて全ての公立高校を共学にするという方向も大方決まっている。大いなる議論のまき起ることが予想される。いづれにせよ戦後教育の理念と制度が、新生という名のもとに議論されようとしている。憲法は国の骨格を示し、教育はその精神を形成すると云う。桜井直紀学校長の唱えている、当たり前前のことが当たり前前に出来る人間になること、を目標とした教育が期待されるのである。

(全米商連副理事長)

関くんべい取締役社長 五六期



二〇世紀最大の発見は

同窓会副会長 佐藤 和徳

高々新年会の挨拶で、今年は世紀末ではなく、世紀越えの年と申し上げた。二〇世紀の科学の進歩は目覚しく、人類生物が押し潰される懸念を抱かせる。二〇世紀最大の発見はという問いには多くの答えがあるが、私は一九五三年ワトソンとクリックによるDNA、RNAの発見をあげたい。

このDNAには三五、四〇億年前に発生した生命と地球の歴史が刻まれているという。現今、家系などのルーツを探ることが静かなブームになっている、人類のすべては旧人、原人、猿人、霊長類、鼠の様な哺乳類として、いつかは単細胞生物からウィルスに達してしまう。すべての生物は糖類をエネルギーに変換する情報を持ち、DNAの複製、RNAへの転写の過程などを共有している。

協和酸酵平日正社長(五七期)が母校での講演で、ヒトゲノム解析計画について触れたとのことである。Genomeは遺伝子(gene)と染色体(chromosome)の合成語という説があるが定かではない。人の全遺伝情報の解析などは、15年前までは途方ない事と思われていたが、本年五月、国際チームが85%の解説を、六月には米国の一ベンチャー企業が独自の方法で全解説を発表した。

この全ゲノムショットガン法は速度の点で勝れているが、精度の点でDNAの

正しい順序を保ちながらの方法に劣っている。遺伝子特許による医薬品の独占開発などを目指した行為と思うが、ヒトゲノム情報は全人類の共通財産である事を忘れてはならない。疾病は外部から侵入の病原体によるものと、遺伝子の変化に深く関係したものに分類する考えがある。遺伝子による診断と治療が既に現在、開始されており、一人一人の遺伝情報を基に、各個人に合った薬剤処方などが考えられる。いずれにしてもヒトゲノム解析のもたらす情報は使い次第で、大変有用であったり、とり返しのつかないもの、刃の剣になりうる。

人とチンパンジーの、塩基配列の比較では一、二%のちがいがあり、人間同志では九九・九%の一致をみており、この〇・一%のちがいが千差万別の個性差をつくりあげている。その塩基配列はアデニン、シトシン、チミン、グアニンの4種の核酸塩基の並び方を意味するが、ジャンク(がらくた)と呼ばれる意味不明の部分もあり、各個体の遺伝子間距離は更に近似したものになりうる。

秀才君も油断せずに又、鈍才君も諦めることなく根気をもって、自己と母校を支えていく事を熱望している。



四〇年の椅子

全日制教頭 福田 賢吾

理科教室で使われていた椅子を一つ頂戴することになった。よく見かける背のない椅子である。解体が進む理科棟の床で、それは実験机や窓枠などと共に大きな山となって潰されるのを待っていた。購入時と思われる「昭和三十五年No.四十七」と書かれた文字があった。昭和三十五年といえば、卒業前の二ヶ月半ほどだが、私もまだ高生にいた年である。役目を終えた椅子は潰されるもよし、また、一つの記念だから載せておくのもいいかとも思った。

この椅子の堅牢な作りがそばにいた職員の間で話題になった。椅子は櫛のような堅い木でガッシリと組まれ、さらに、脚部や座る部分の丸い天板との接続部分には、十の字や鉤形の鉄で補強されている。まことに当時の木工品の作り具合が見て取れる代物である。金属のパイプと樹脂の板で軽快に作られているこの頃の椅子とは余りに違う。人の手間、製品に求める価値の質という点で、四十年前はこうだったのかと些かの感慨をおぼえた。十分な手間と材料を使った剛直な椅子から、色が明るく軽い椅子へ。物の変遷としてこれはごく自然な道であると思える。椅子だから人が腰かける。そこに座った高生にも、椅子のそれと同様の四十年の移り変りがあったのだろうか。椅

子の例に見るように、物の変遷は大きく、また明らかである。弁当の中身、英和辞典の質、自転車など間違いなく大きく改善の方向で変化している。しかし、人間(高校生)の変化の見定めは簡単ではない。また物と違って、時間の経過と共に改善するということでもない。どこを断するかは意見百出するであろう。

昔から現在まで高生は自らを「山猿」と呼んできた。この呼称は、むしろ愛すべきものという印象でとらえられ、その意味するところは、外見を構わずたくましく生きる野性であり、人と人との連帯を大事にするといったことではなかったかと思う。高生の変化を辿る一方法としてこの山猿の視点に立つて見るのも面白いのではないか。変化の流れとなると私に自信はないが、昔の山猿は、他人は知らず、自分はこれでいいという個性もしくはアクが今より強かったかと思う。世の動きに必ずしも同調せず、他と自分と同じであることを嫌うという風もあった。だがこの一例にも、その客観性や好し悪しの点で議論はあるだろう。やはり多くの人が考えてみるに越したことはない。同窓諸子や今の生徒が一座となつてこんなことを考えてみるのも面白いかも知れない。

(五九期)



京浜高中四一会の集い

依田 文彌

特別寄稿

昭和十七年に高崎中学（旧制）を卒業してから約六十年にもなります。

七十も半ばを過ぎ、第一線を次の世代にバトンタッチして余暇タッピーとなると、各種OB会などに出席して談笑することが楽しみとなりました。なかでも中学同窓会は、多感な少年時代の仲間の集まりであり、先輩後輩も無く、仕事関係も無く、心休まる嬉しい集いです。

現在、我が「高中四一会」の総会・懇親会は、四一にちなんで四月一日実施を定例として、毎年高崎近郊で行われています。

この会には京浜地区在住会員による「京浜高中四一会」という分会があり（現在会員二八名）、年一、二回、簡単に集まって東京地区で懇親会を開いています。これに本部高崎地区会員の参加は大歓迎で、毎回都合をつけて有志会員が上京し参加しています。

昨年十月には新宿区市ヶ谷で行い、アトラクションとしてすぐ近くの自衛隊市ヶ谷台を見学しました。

市ヶ谷台は、徳川時代尾張徳川家のあったところです。陸軍士官学校、陸軍省大本営等がおかれ、終戦後ここで極東軍

事裁判が行われました。

自衛隊創設後、部隊・学校が駐屯しましたが、ここに防衛本庁が移転し日本防衛中枢になることになりました。

これまでの全ての建物が壊され新庁舎になりましたが、歴史的価値のある旧本館の一部（極東裁判の行われた大講堂、陸軍大臣室、皇室の部屋、等）は保存のためそのまま移設して、昨年記念館として開設されました。

この記念館と、ハイテク通信部隊の一部を見学しました。係員の熱意のこもった詳細な説明に聞き入りました。その他、三島由紀夫らが集団剖腹自決した総監室と刀の傷跡（昭和四五年）や、群馬で行われた陸軍大演習観閲式の大きな写真（昭和八年高崎練兵場）などもあり、昭和時代の全期間を過ぎた我々には、その歴史の一端が想い出され、感慨深いものがありました。

本年六月には、東京の新名所お台場で集いました。東京みなと館を見学したり海岸を散策したりして、近代都市臨海副都心で若い息吹に触れました。

歓談のつど、学び舎の風格のあった上和田校舎時代、野原に新設された乗附校

舎時代の、忘れていた想い出や知らなかった話が次々と飛び出し、いつも時間のたつのを忘れます。遠慮なく話せること、また同窓のドクターの高齢者健康に関する話など、老化防止にも役だっています。最後は高中応援歌と級会の歌を斉唱して散会します。

この会がいつまでも続けられることを願いながら、近況をお知らせします。

（元自衛隊陸将補 四一期）





秀嶺様名紫に

鈴木 武文

特別寄稿

昭和二十一年四月高崎中学校入学、二十三年四月高崎高等学校併設中学校となり、二十四年四月高崎高等学校に進学、二十七年三月に卒業というのが同期生の中では一番多くの者の経過であろう。

太平洋戦争の最中に学齢期を過ごした我々は、めまぐるしい制度変更を経験した。尋常小学校に入学し途中から変わった国民学校を卒業し、旧制中学校に入学し途中から現行制度に切り替わった。高中入学の時は、小学校からすぐに入学した者や、上の高等小学校を終えて入学した者も一緒で、現行の中学一年から三年が同じクラスに居るようなものであった。昭和二十二年に現行の教育制度になり、いわゆる新制中学校ができたので、我々の後輩は小学校を卒業すると皆そちらへ行ってしまったため下級生は入学してこない。学校の慣例で便所掃除の分担は最下級生が当てられたので、結果的には高校二年になるまで四年間は常に便所掃除を受け持つ羽目になったということは、多くの同期生の共通の思い出であろう。

二年生で、三年は受験期で家庭学習に入っていた。実は私はこの火災の発見者ということで翌日の新聞に載せられた。正確に言えば、私が発見したというより、バスケット部員が練習中に誰言うことなく「臭い、物が燃えているのでは」というので窓から見上げたところ、本館西端の破風辺りから煙が出ており、火事ではないかと練習を中断して校舎にかけ登ったというのが事実である。職員室に連絡に行く者、近くの水道で水を汲んでかける者など、皆練習着のまま走り廻り、廊下の天井際を火と煙が渦をまいて走る下をくぐった覚えがある。校長室にかけ込み、優勝旗や優勝杯をまどの外に放り出し、焼失は免れたが、開会式での返還の際に台が無かったり把手が欠けたりした優勝杯で、ばつの悪い思いをしたこともあった。その後、焼け跡の片付けの苦勞や、控所（体育館）や講堂の間仕切り教室での授業など、火災にまつわる思い出は各人それぞれに数知れない。

我が五十一期には会報が発刊されている。創刊は卒後三十五年となる昭和六十年十二月、編集発行人田中順君によるもので、A5版二十頁「秀嶺様名紫に」と題し、同期会のこと、同期生の各種エピソード、特別寄稿、諸連絡等である。その後毎年発刊され、六号まで田中君が担当し、七号から持田章君が引き継ぎ今年八月に第十二号が発刊された。気配りの行き届いた編集を一人ですべてしており、同期生の絆の役を果たしている。また、還暦記念誌を平成六年に発刊した。B5版全二百四十頁、「秀嶺様名紫に」は、同期の画家島崎庸夫君の表紙・カットで、恩師の玉稿二十二編、同期生百二十編の他、貴重な資料や写真などでまとめられた。卒業生二百七十八人、残念ながら鬼籍に入られた方約五十人、職場の第一線は退いた者が多いが、それぞれに充実した日々を過ごしている。

多感な青年期を過ごした高中・高専時代の思い出や、「秀嶺様名紫に」香りのゆかし和風の庄で始まる「クラス会歌」を口ずさむ度に、心の故郷から活力を受ける思いがするのは私一人ではあるまい。

（群馬大学名誉教授 五一期）



高高時代の思い出

内田 欣治

特別寄稿

私が、六十一の同窓会に誇れることはマラソンの成績だけである。一年が七位、二年のときは四位、三年のときは確か一位という成績だった。

一年で七位という成績をとったときは、休み時間にラグビー部やサッカー部の先輩から、是非うちの部に入ってほしいと勧誘をうけたものである。

高高在学中は、定時制に通っていた大沢進氏が四年連続で一位であった。在学中に彼を破りたいと思い、夕日を浴びながら黙々と碓氷川の堤防を走っていた。

それにしても大らかな時代だった。国道一七号を通行止めにして、全校10kmマラソンのスタートが切られた時代だったのだから。

今でも同窓生から「欣ちゃんはマラソンが速かったよな」と言われるから、マラソン以外は存在感のない高校時代だったのだろう。

マラソン以外に思い出すことといえば、日だまりの廊下にたむろしてパンを牛乳で飲みほしたり、自習時間といえは決まって徒然に観音山界隈を徘徊し、無気力に時を過ごしていたことである。そう、あれは確か三年のときのことだ。Tから渡されたのかNから渡されたのか、又、どういうやりとりのなかで渡されたのか記憶にないのだが、何気なく手渡された春の声に誘われたっけ

いい気なころもあったんだ

無理な自分を繕って

それで今日まで泣いてきたという短歌を四〇年近く経つ今も時々思ひ出す。

その私が、今弁護士をしているのだから、人というものはわからない。

今でも司法試験の合格発表の夢を見る。合格者名簿に自分の名前がなく、冷や汗をかいて目を覚ますことがある。その私が、二十七年余この仕事を続けられたのも、六十一の同窓生はじめ、先輩・後輩の支えがあったればこそと痛感し、感謝し、改めて高々を出たことを誇りに思っている。

私と同じ思いを抱いている同窓生も決して少なくないと思うが、とりわけ我々の期のまとまりの良さは自慢できる。

平成四年度の新年同窓会総会の幹事期の時は二〇五名余の同級生が参加したと、高々一〇〇周年事業では二〇〇名を越える同級生が募金に応じたことを筆頭に、何かあるとそれを口実に永代会長の本間君の御園寿司に集まり、酒を酌み交わしながら古き良き時代の話に爆笑したり、世相・人生について激論を交わしている。

最近では、T君が長官に就任した、A君が署長に就任した、T君がやっと念願の議長に就任したと言っては高崎近郊在

住の四〇、五〇人の仲間が電話連絡一本で集まり、旧交を暖めた。

地元だけではなく、東京では平成四年の同窓会新年総会の幹事期を契機に、京浜高々六一会が発足した。以来、毎年開催される京浜高々六一会には五〇、六〇名の京浜（九州・名古屋・宮城県からも）の同窓生が参加し、参加者一人一人が三分間スピーチのなかで現況報告・意見表明をするのが慣例になっている。

この六十一のまとまりの良さは、同窓生一人一人の人の良さと暖かさがそうさせているのだと思う。

最近、S君から御息女の結婚式の案内を手にして涙が止らなかつた。若くして不慮の事故に遭遇し、車椅子生活を余儀なくされた彼を、剣道部や多くの仲間が今日まで支え続けてきたという。おめでとう、御苦勞様……。

素晴らしい仲間が沢山いることを誇りに思うし、この仲間から教えられることがばかりである。

K歯科医院の玄関を入ると、「鬼手仏心」という額が目に飛び込んでくる。

一人一人真摯に生きている。

春の声に誘われることなく、背伸びすることなく、これからも仲間との交流を大事にしてゆきたいものである。

（弁護士 六二期）



高々時代の思い出

坂本 正樹

特別寄稿

同窓会報が送られてくるたび、諸先輩の「思い出」の文に接してきた。大先輩の文には戦時中や終戦直後の話もあり、その度に我々の高校時代の平和のありがたさを思い知らされる。

我々の時代、戦争といえば普通は受験戦争だった。しかし、私にとっての戦争は陸上競技であり、足の剥離骨折という傷害に対する戦争であった。私は走れない競技者だった。この思い出が強すぎ、まず浮かんでくるのは、友人との思い出ではなく、高校三年の夏休みの午後、毎日城南の陸上競技場で砲丸投げと円盤投げの練習をしていたことである。この二種目は走らなくともできるので二年生の冬に短距離から転向した。下級生は午前中練習していたが、私は当時やり投げで全日本クラスだった農大二高のOBのTさん（ゴルフで有名な田島創志君のお父さんである。）の指導が受けたくて、Tさんの練習時間に合わせて練習していた。親切な指導のおかげで記録も伸びたが、Tさんは私のことをずっと二年生だと思っていたようであり、最後の試合に砲丸で二位になったとき「来年もあるのだから、ここで一位になっておくべきだった。」

と怒られた。高々の三年生が、夏休みに毎日練習していたとは考えられなかったであろう。

陸上競技のことばかり考えていたからと言って、勉強をおろそかにしていた言訳にはならない。陸上部同期の小熊君はインターハイにも出て、学業成績もトップクラスだった。私と言えば、試験の前の一週間くらいだけ本気に勉強してごまかしていた。結局保健、倫社、政経という他人はあまり力を入れない科目だけ五で、英語や古文など一夜漬けが効かない主要科目は三だった。体育はずっと四だったがこれには理由がある。二年からは足の故障のため、見学が多かったから仕方ないが、一年の冬までは全くの健常体であり、このときは五がつかないのはおかしい。しかし、体育担当の小林馨先生は「俺よりできるやつでないと五はやらない。」というポリシーを当時持っていた。その年小林先生は国体の走り幅跳びで二位になったくらいであり、五をとれる高校一年生は日本中探してもいたかどうかである。

ごく本質的なところだけはきちんとし、そうしなくても良いところは極めて自由

だったように思える。そう言えば、生徒総会の議長が左利きとの理由で選出されたことがあった。生徒会長が「この中で左利きの人はいますか。」と言うので手を挙げたら、「そうかい、ぎゅちゅかい。そうかいぎゅちゅお願いします。」と言われたのだそう。この話は入学直後に聞いたが、私はこれで高々がいつべん好きになった。

陸上競技ばかりで人付き合いもあまり良くなかった。しかし、法律事務所を高崎で開業し、高々の卒業生にも支えられて何とかやってきた。「高々」と言うだけで卒業生が集まってきた。現在親しくしている同期の友人のほとんども高校の同期だったことをきっかけとして、新しく友人になった。そして、これらの友人たちを中心に我々が幹事の平成一四年新年総会の準備も始まっている。また、小林馨先生も私たち夫婦の仲人である。高々を卒業したことは私にとって大きな財産となっている。

（弁護士 七二期）

特

集

百年史人物史編「翠巒の群像」

こぼれ話…

岸浩初代同窓会長の戦後の活躍

清水 吉二

「翠巒の群像」では清水善造、岸浩、住谷啓三郎三先輩の評伝を担当しました。この内、国際的にも有名なテニスの清水選手、昭和三十年から四期にわたって高崎市長を務め、町村合併や企業団地の造成などで現在の高崎の基礎をつくった住谷市長については、或る程度知っていましたが、岸浩初代同窓会長については、恥ずかしながら私自身在校中の同窓会長にもかかわらず全くの白紙状態での執筆でした。それでも子ども心に両親を始め多くの市民たちが「きしこう」という名を口にするのを何度も聞き、そこに一種の親愛の情がこもっていたように感じていたのも事実で、岸浩Ⅱ「きしこう」が高高に限らず市民とどんな関わりを持っていたのか興味を持ちながら資料集めを始めました。

丁度、高崎市編さん委員会の調査員をしている関係で、調査の合間を利用して当時の新聞や地元雑誌に出てくる関連記事を残らず集めてみましたが、何をしてても資料が少なく、特に戦中、戦後の資料が当時は殆ど見当らず困っていました。

そんな時、同期会で逢った岸家の親戚の岸豊君から耳寄りの話を聞きました。岸家は東京杉並へ移ったが、九十歳を越える奥様の郁子様のご健在で、仕舞いのお師匠をするくらい矍鑠としておられるというのです。それから奥様との手紙のやり取りで、今までに調べた事実の確認や戦時中の様子などを細かく伺ったり、貴重なお写真の数々をお借りしたりと順

調に調査を進めることができました。

ところで「翠巒の群像」の刊行後、今までわからなかった岸先輩の戦後の活躍が高崎市の調査のなかではつきりしてきました。敗戦直後の昭和二十一年、「高崎地区教育再建父兄大会」が参加者二千人を集めて中央小校庭で開かれましたが、議長として「全国教員組合大会」の七要求を全面的に支持する決議をまとめ政府に送ることを決めています。また、高崎地区労働教育委員会会長として、昭和二十七年の関東導火線争議の調停にあたり、長かった争議を解決に導いたほか、二十九年高松町に建設された労資会館の完成や、労資双方を啓発する労働大学の開設にも中心的な役割を果たしています。

（「新編高崎市史」資料編十一参照）

これは「翠巒の群像」でも書いたことですが、大正十二年の上州絹糸紡績の事務長時代にも労資紛争が起こり、工員側の要求を大幅に受け入れた調停案を作っています。また、昭和初年の高崎市助役の際、選挙違反事件で市長の後任がなかなか決まらなかった時も市長代理として幾多の難問を市民の立場にたつて的確に処理しています。

戦前、戦後を通して、常に市民、特に弱者の立場にも眼配りを忘れない仲介者・岸浩の存在は、当時の市民にとって親しみをこめて「きしこう」と呼べるヒーローだったのでしよう。

（岸浩伝執筆者 五一期）



「高崎高校百年史」

■本書の体裁

上巻 通年編 本文約800頁

下巻 人物史編「翠巒の群像」 本文約500頁

頒布価格 5,000円（送料込み）

■申込方法

TEL・FAX・Eメールで同窓会事務局（本誌P14参照）までお申し込み下さい。折り返し振込用紙を郵送致します。維持会費納入用の振込用紙（加入者＝群馬県立高崎高校同窓会）とお間違えにならぬように御注意して下さい。

現在
頒布中



未完の物語

森田 秀策

私は高中の名物教師猪狩梅三郎、インドネシア独立時の大統領スカルノと親好のあった西嶋重忠、そして郵政事務次官まで昇りつめた田中鎮雄の三人を担当、執筆した。刊行時にはまだ元気であった田中鎮雄先輩は「翠巒の群像」を殊の外喜んで読まれたというが平成十年七月二十日に病没されてしまった。訃報は新聞に出なかったどころか郵政関係者にも知らされなかったという。私もこの年の師走になって夫人から届いた喪中はがきによって初めて知った。実弟の壮児君は四十九期の同級生であったので、武蔵野市の田中先輩の自宅を訪ねることができたのは今にして思えば幸いだった。「生前の兄貴と酒を飲んだのはあんたが最後だった」と壮児君の弁。当時から既に禁酒の生活だったのである。後で聞くと通信病院での検診は続いており、健康の保持には留意、好きだったゴルフも遠ざかっていたという。「兄貴は実は臆病者で、歯医者へ行くのも嫌がった」とも聞いた。あと三か月位しか余命なしという所でやっと手術したが既に他に転移して手遅れ、大腸ガンであったという。元事務次官の他界を知らされた郵政関係者はその年の秋「田中鎮雄氏を偲ぶ会」を開き、未亡人と壮児君も参加して挨拶をしたが、「あの時はなぜ知らせてくれなかったのか」とひどく叱られてしまったと回顧された。

以上の経過によって、はからずも「田中鎮雄伝」の続編とすることができ、同窓会員に報告



の機会を与えられたのは有難かった。しかし、人物伝を書くということは極めて難しく、資料が多くあればあったでその選択に悩み、また資料が少なければ、何を素材にして一人の人物像を描写していくかに困惑してしまう。

田中鎮雄の場合、幸いにも高中時代の同級生が何人か市内に健在であり、高関町の松本栄氏は31期同窓会の世話人を長く担当され、また下横町向雲寺の山内憲三師は亡き同級生の慰霊供養をいつもされて来られたといい、官僚のトップを行く田中は同級生の誇りでもあったということが調査のスタートとなった。いくつかの要職を経て郵政事務次官に就任後、高崎・前橋郵便局視察で故郷に錦を飾ったが、県庁での記者会見では群馬テレビの創設にふれるなどマスコミに登場する「時の人」でもあったが、これに併せて母校高崎東小や、同級生による祝賀会開催前後の動静については、知人の地元局長の談話、東小の校務日誌、新聞記事などで追跡し明らかにすることができた。その過程で、東小時代の田中少年が野球に熱中したこと、高中受験については栗原先生の指導が忘れられずに帰郷時にお礼によく行ったというエピソードも伺うことができた。

人間の一生は有限だが足跡は広大である。私たちの知り得るのはごく一部分である。短い表現でしか描けない伝記は所詮「未完の物語り」であろうと思っている。

(田中鎮雄伝執筆者 四九期)



その他「翠巒の群像」に収録されている人たち

田中	内藤	村上	岩澤	猪狩	峯岸	澤柳	金	勝山	阿久	丸茂	三輪	岡本	西嶋	分部	宮下	狩野	山口	橋本	高間	小山	小島	井上	吉田	堀川	住谷	佐々	岸	篠原	大手	中曾	福田	
悦平	由己	成之	正作	三郎	米造	鶴泳	功	重	亀夫	重	八郎	正己	重忠	順治	秀列	近	富	富	繁	四郎	軍造	一	治郎	寛一	三郎	四郎	福治	秀吉	拓治	一	康弘	夫

論壇

インビジブル

門傳 剛



「インビジブル」とは肉眼で見えないことである。同じ題名の映画が公開されているが、透明人間の物語である。そう言えば幼少の頃は透明人間を含めて目に見えない物事への憧れや好奇心は人一倍強かったと思う。今はどうであろうか。憧れや好奇心と縁遠い時間的余裕のない寂寥な自分に気付いてしまう。それと同時に自分の周囲の環境にはインビジブルな領域が多いことに驚かされてしまう。

私は内科の医者をしていて患者の診療と医学研究を半分半分で行なっている。診療においては体内の事を数値化したり画像化したりして診断治療を続けている。研究では糖尿病、高コレステロール血症、甲状腺疾患に関係している遺伝子を解析しており、最近話題になっている遺伝子治療に何らかの形で将来寄与できればと願いながら試験管を振っている。

遺伝子という教科書に記載されている幾何学的な美しいらせん型をしたDNAを思い浮かべる人が多いと思う。しかし実際は全くのインビジブルな世界であり、それをいかに具体化するかが遺伝子工学の解析手法である。例えば寒天状にDNAを流して目に見える線状の物体として検出したり、あるいはDNAを構成しているグアニン、アデニン、シトシン、チミンの四種類のヌクレオチドをコンピュター解析して記号化したりしている。自分の仕事内容を文章にしてみると診療も研究もインビジブルなものへの挑戦で

あると思えてくる。もっと普遍的な視野から眺めてみると、医学を含めて科学というものはインビジブルな領域をいかにビジブルな領域、すなわち目に見える世界に引き上げることという事に帰結する様な気がしてくる。

私は六年前に米国のボストン市にあるハーバード大学医学部に遺伝子研究のため、三年間の留学生生活を経験してきた。大変魅力的な事柄の様に映るかもしれないが、私の上司の友人がたまたまハーバード大学に移動して人を募集していたのと、留学希望者の順番が私に巡ってきた事より、私は運が良かった、それだけのことである。今だから話せる事だが、当時は遺伝子にはほとんど興味が無かった。アメリカという未知の国、そしてそこで生活をするに私の好奇心は向けられており、留学はそれらを満たす絶好の機会であった。

ハーバード大学は総合大学であり、多分野の日本人も数多く勉強に来ていた。その中に偶然にも高同の同期生である保坂雅樹君が法学部に留学していた。彼とは高同時代は同じクラスになったことが無かったが、異国の地で家族ぐるみで交際していたのだとは何かの縁であり楽しい思い出である。他にも医者以外の多分野の人達と知り合う機会があり、(私達医者という職業は医療関係者との繋がりばかりの閉鎖的な職種である)私の人生の中で最も貴重な期間であった。

また三年間は診療する事なく毎日研究に没頭していたため、いつの間にか遺伝子実験が楽しくなり延いては自分の天職ではないかとまで感じられるまでに成長してしまっただけ。昼間はDNAと戯れ、夜は地ビールを楽しむ(ボストンの地ビール、特にサミュエル・アダムスは比類なきおいしさである)、週末はゴルフで体を動かすという、私にとっては至福の時であった。

また日本という国を外側から観察できたのは大変興味深い経験であった。ちょうどこの時期に地下鉄サリン事件と阪神大震災があり、アメリカではかなり過敏な報道がなされ、冷静に分析されていたのを思い出す。テロ行為や大自然の猛威に常に曝されているからであろう。この時、初めて私は日本が平和馴れしすぎてしまっている事を忘れてしまった国と認識させられた。

留学中の休暇中は専ら旅行に行く事が私と妻の楽しみ方であった。ムース鹿と出会えるイエローストーン、雄大なグランドキャニオン、橙色の岩で囲まれたザイオン、滝が素晴らしいヨセミテなど、アメリカでは有名な観光地はほとんどが国立公園であり、それぞれ特徴のある自然の姿に感動したものだ。またこの大自然の中では自分達がいかに小さく無力であり、自分達の行為はきつと無意味であるのだから無理するなと妙に開き直りの気持ちを持たせてくれた。これが今で言うところの癒しではないかと思う。

この癒してくる大自然の保護にアメリカ政府は莫大な額の国家予算を回している。一方で私は私が研究していた様な遺伝子の解明や他の科学の進歩のために援助する金額も巨大なものである。アメリカは目に見えるビジブルな物事と目に見えないインビジブルな物事の重要性和バ

ランスを認識している国である。

日本はどうであろうか。私事ではあるが、国からの研究援助費用は年々減少しており、大きなプロジェクトは組めず、研究費をもらうための無駄な優等生的な研究に終始することになり、インビジブルからビジブルへの科学の発展には貢献できそうもない。それだけならば良いが、報道等に目を通すと環境保護は意味不明な建造物の林立により侵されているのを見ると、殺伐とした矛盾を感じてしまう。アメリカが発見したバランスが今の日本では垣間見られないのはとても残念である。

海外へ出る機会があれば行くべきである。旅行でも仕事でも何でもよい。アメリカナイズされた一人の日本人の戯言と思っても構わない。理由は二つ。一つはその国を目で見て感じられるからである。行かなければその国はインビジブルであり、体験する事でビジブルに姿を変える。科学の進歩と類似している。もう一つは日本を比較できる様になるからである。理解するのは難しいが、客観的に観察できて他者と比較する事、そうすると日本への愛着、愛国心が自然と湧いてくる。ちょうど故郷を離れて初めて故郷を懐かしく思う気持ちと同じなのかもしれない。私は物心ついてから群馬を出た事がなかったのだ、留学体験によりこういう気持ちを持てたのだと思う。

インビジブルな日本がビジブルな日本に変わったなと思える人達が増えてくれれば、矛盾の少ない愛すべき日本になると確信している。私達が愛すべき日本を、更には私達の子供達が愛してくれる日本の姿を模索することが私達若手世代の責任ではないかと考えている。

(群馬大学医学部第一内科助手 八一期)



同窓会だより

「伏える会」という何やら怪しげな名前の会があります。名前だけ聞くとどこかの会社の前で街宣活動でもする団体かと思われまじうが、実際は至って真面目な活動をしている団体です。今から三年程前に、恩師である吉永哲郎先生の定年を祝う会に、渋工、高女、前女の各学校で先生のご薫陶を受けた教え子達が集まりました。吉永先生は生涯一教師として、常に我々の側で教鞭をとってこられた先生で、私が高女在学中も、高々のパンカラ気質を保つ為に「朴蘭の会」と称して高ケタで通学しようという活動をしてみたり、その破天荒な人柄と大胆な行動力に、当日集まった教え子達は思い出話に花を咲かせ、先生の早すぎるご定年を残念に思いました。



その席で、先生もまだお元気なことだし、この仲間達で何かやってみようじゃないかというこ

とになり、早速各校、各期の代表者が世話人となり、会の設立に至りました。

「伏える会」(大蔵流の狂言)

世話人会会長 藤田 実

さて、会の名前は何にしようかという段において、よし、ここはひとつ世の中に対して大きな声で「伏え」ようじゃないか、それも遠吠えじゃなくて実際に行動しようじゃないか、ということだ。「伏える会」などという妙な名前になってしまいました。

この会は会員のひとりひとりが持っている、今の世の中に対する問題意識をもとに、同じ意識を持つ人達が分科会を作って活動して行くことが基本になっています。設立当初は教育、農業、まちづくり、特産物など6つの分科会にてスタートしましたが、その後の紆余曲折の末、現在の中心的な活動となっているのが「狂言を観る会」です。

この分科会は、吉永先生が狂言の大蔵流山本家の皆さんと親交があったこともあり、狂言を高崎の地に根付かせようという目的のもと、春秋二回、高崎シティギャラリー「コアホール」にて公演を行っています。狂言という古い言葉集使いでわかりにくそうな印象を受けますが、能とは違って語り言葉が中心ですので、初めての方でも充分お楽しみ頂けると思います。

是非一度、コアホールに狂言を観に来て下さい。心からお待ちしております。公演に関するお問い合わせ等につきましては、分科会長の丸山ちひろ(〇二七三四三〇五八四)までお願いします。

(藤田エンジニアリング(株)取締役 七九期)

高高通信制同窓会とは

会長 白石 三郎

昭和五十七年四月高高入学、三年前に尾張久雄会長の後任として選任され現在にいたって居ります。今回通信制への入学動機より書いてみます。

昭和三十七年高校入試の予備(すべり止め)として自動車関係の専門校を受験し、当時花形の自動車産業の魅力に引き込まれ以来二十年黙々と自動車整備に携わって参りました。ところが監督官庁に提出する書類の作成は行政書士の資格がないと業務に支障をきたすらしいとの風評が気になり、ここで如何にしても高卒の証書が必要になりました。高高入学は中学時代ドウシテ毛勝てないライバルが卒業していった高校であり入試は尋常ではないはずと腹をくくって願書を提出した。意外？入試はないとのこと。大学生にバイトさせて卒業しようと思ふ事を考え、ほくそえんだ。しかし現実には厳しい。漢文、英語、物理の公式これらを自家用車の力セットに吹き込み車に乗ればすぐにきき、また自宅の壁、天井には数式をはり当時小学生だった俺と娘に笑われながらの四年間でありましたが、辛いはずの学習もいつしか楽しく充実した日々が変わっていききました。その頃には子供たちも一所に勉強するよう

になっていたし、予定も通信教育優先になっていた。そんな私に妻は(高高にズットいつたら)と言った事もあった。学校に嫉妬したらしい。昭和三十年代の卒業生数一六名同四十年代四十三名この数字からも、先輩は私よりさらに努力が必要だっただろうし家族の協力はもとより会社の仲間の協力まで必要であつたのでは？私がそうであつたように。そうした先輩が母校高高での出会いを大切にしようとして昭和五十六年に通信制同窓会を発足してくれた。初代会長早乙女さん、二代目尾張さん、そして現在私が引き継いで二期目です。主な活動は三月に卒業生の祝賀会、七月同窓会だより発行、八月に一泊の懇親会となるべく会員が有意義に参加できるよう努力をしているのですが結果は満足できるものではありません。伝統ある高高同窓会の一期にも満たない少数の会ではありますが、今後ともよろしく願ひいたします。

最後になりましたが、横田同窓会長並びに同窓会役員の皆様には、いろいろとお心づかいいただきまことに有難うございます。紙面をおかりしましてお礼を申しあげます。

(富岡甘菜自動車整備(株)専務理事 通二八期)

同窓会だより



同窓会事務室が整備されました

同窓会は一般に会員が増え続ける宿命にあり、本同窓会も毎年三〇〇人の新会員を迎えております。これに伴い事務量も増え続けているため、事務室の機能強化が求められてきました。これにこたえて、平成十二年度から従来校舎内に置かれていた同窓会事務室を翠蘭会館内に移し、ここに専用電話、FAX、コピー機、パソコン等を設置し、専任の事務員が月曜から木曜の午前九時～午後四時の間常駐して事務処理を行うことになりました。

この事務室整備により、従来未整理だった諸資料の整理、同窓会ホームページの作成、パソコンによる会計管理等が行えるようになりました。資料の整理につきましては、現在校友会誌「群馬」(明治三五年～昭和一七年・昭和三七年～平成二二年)の目次索引がほぼ終了いたしましたので、執筆者名がわかれれば、その掲載作品は直ちにコピーして提供できますので、お申し付け下さい。今後は百年史編集にあたり収集した諸資料の整理に着手します。なお、会員の方々のお持ちの資料で同窓会にご寄託いただけるものがございましたらお知らせ下さい。次の年史作成の際に役立つように整理、保管しておきたいと思えます。ホームページにつきましては、一応作成した段階で、内容は今後さらに充実させたいと考えておりますので、アクセスしてみても気付きの点がありましたらばご教示下さい。



□同窓会事務室専用TEL・FAX/027-320-6024
(月曜～木曜/9:00～18:00)
□ホームページアドレス <http://www3.ocn.ne.jp/~tktkob/>
□Eメールアドレス E-mail:suiran@wonder.ocn.ne.jp

同窓会会員名簿の刊行について

同窓会会員名簿は五年前に増補・改訂し刊行しており、次回の刊行は平成十四年となっております。このため、次回刊行の準備が十三年度から始まります。会員の現況を正確に把握するには、会員の皆様のご協力が不可欠です。お手数でも現況調査には是非ともご協力下さい。現況調査はがきは七月八月発送の予定です。記載事項を確認・訂正の上、返信はがきを投函して下さい。また、これには名簿購入予約と広告掲載予約の記入欄もありますので、ご希望の有無を記入して下さい。

なお、本同窓会の作成する名簿は卒業年度順によるものです。職業別名簿等の別種の名簿作成は行っておりません。このような企画には本同窓会は一切関係ありませんのでご承知おき下さい。ご不審のことがありましたら、本同窓会事務室にお問い合わせ下さい。

維持会費納入についてお願い

ご存じの通り、同窓会は皆様の維持会費によって運営されています。この維持会費収入は平成六年まで順調に伸びておりましたが、七年度以降漸減しており、十二年度は十一月五日現在で五百二十五万円と七年度以降最低の状態にとどまっております。十二年度予算の編成に当たりましては、維持会費収入を実体にして、従来より百万円減の六百万円とし、支出の削減をしておりました。それでも維持会費納入の現状ではきわめて厳しい状況にあります。このため急速な報作成費の大幅な削減を行うなど緊急対応策を講じております。しかし、こうした対応策には限界があり、維持会費の増収以外に有効な対策がありません。同窓会の置かれたこうした苦境をご理解いただき、維持会費の納入に是非ともご協力下さるようお願いいたします。

なお、納入には会報に同封の郵便振替用紙をご利用下さい。手数料は同窓会負担となっております。

卒業生の作品紹介16



「須恵扁壺」佐藤 桂(菊男)

銀座のギャラリー小柳で個展した時、「種シリーズ」で大作十点を発表しました。

様々な種をスケッチし、その形を底面にして手捻りで少しずつ積んでゆくという手法をとりました。つまり、造り始めには完成図はなく、種が成長するに任せて造った訳です。

この作品はその内の一点で、穴窯という薪の窯で、「須恵器」という、古代の焼物を焼く方法で焼いたものです。

「須恵器」はモノクロの焼締で、古代的でありながら、造り方によってはたいへんモダンになるので、私のライフワークにしています。

この「種シリーズ」は、私の四十代の代表作と云っても良いでしょう。

陶芸家 (六六期)

平成12年度

〔書〕

★褒章…なし

●叙勲

・勲五等双光旭日章 地方自治功勞

中山 治秀(73) 第43期

元県議会議員/松井田町行田

〔秋〕

★褒章

・黄綬褒章

武井 二郎(73) 第44期

県森林生産流通共同組合専務理事/松井田町新井

●叙勲

・勲四等瑞宝章 税務行政事務功勞

片山 菊剛(70) 第46期

元新潟税務署署長/高崎市石原町

・勲四等瑞宝章 地方自治功勞

中島 正(70) 第48期

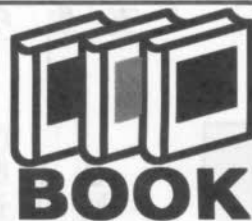
元高崎市市議会議員/高崎市浜川町

・勲四等瑞宝章 議員運営事務功勞

松井 弘(71) 第46期

元参議院参事/安中市安中

翠 文庫



●著書

- こころの原風景
- THE UNIVERSE OF ENGLISH
- 郷愁としての昭和
- 佐藤君と柴田君
- ロックピープル101
- The Parallel Universe of English
- ラップという現象
- 21世紀を拓く法的思考
- 飛翔
- 司法改革
- 源氏物語 -いまに遊ぶ-
- 峠 幻視行(上毛文庫)
- 続万葉を哲学する
- 他文化主義と共生
- 春風句集
- ざんげもどき
- 日々の?!なるほど歳時記
- Phenolic constituents of Licorice
- たかさき町知るべ
- 教育法学の原理と体系
- わかる使えるインターネット&パソコン
- 翠樹 vol.46

●作者

- 須藤 宜(49期)
- 〃
- 佐藤 良明(69期)
- 佐藤 良明ほか(69期)
- 佐藤 良明ほか編(69期)
- 佐藤 良明ほか編(69期)
- 佐藤 良明監修(69期)
- 反町 勝夫(58期)
- 〃
- 〃
- 吉永 哲郎(54期)
- 〃
- 〃
- 富所 隆治(53期)
- 村上 信(25期)
- 関口 八郎(33期)
- 大木 紀元(58期)
- 野村 太郎(53期)本名 野村太一郎
- 田島 桂男(51期)
- 永井 憲一(49期)
- 金井 明(68期)/牛田 啓太(95期)
- 京浜高崎高校同窓会

翠樹セミナーについて

平成十二年度の翠樹セミナーは、第一回が六月十七日に、元高崎市教育委員会生涯教育部長鬼形健氏(五六期)の「安心と自立」と題する講演、第二回が十月二十一日に、株式会社大紀デザイン代表取締役で本同窓会副会長大木紀元氏(五八期)の「考えられないことへの挑戦」と題する講演が行われました。

母校だより

各部の活躍・活動

陸上部

我々陸上部は今回、五十年以上の歴史を誇る関東高校駅伝大会に初出場することができました。これも偏に、先輩方の築いてこられた努力が実り、様々な方々からの応援があったからこそ達成できたものだと思います。そういったことに感謝の心を持つことを忘れずに走ることを、我々は常に心懸けました。

関東大会では、上位で戦うにはまだまだ力不足でしたが、県大会のタイムを二分以上更新し、県内では四番目にゴールしました。欲を言えば、私をもっと順位を押し上げる走りができなかった事が残念でした。しかし、トラックアンドフィールド中心だった高々陸上部が駅伝でもアピールできたことは、新たな輝かしい歴史の第一歩として意義のあることだと思います。

駅伝チームは伸び盛りです。県内には、農二・育英といった強豪がありますが、近い将来きっと、全国大会の舞台都大路で、セルリアンブルのユニフォームの雄姿が疾走することでしょう。

中山 陽右

囲碁部

五月十三日に行われた全国高校囲碁選手権県大会で、団体戦・個人戦共に優勝し、全国大会出場を決めることができました。

部員が少なく、活動が思うようにできない時期もありましたが、それ乗り越え、毎日の練習を続けてきたことがこのような結果につながったことを大変うれしく思います。

残念ながら全国大会では、個人戦・団体戦共に一回戦で敗れてしまいましたが、全国と自分との差を改めて知ることのできたよい経験でした。後輩たちにはこの経験を生かしさらに上を目指してほしいと思います。

最後に、囲碁を初歩的なことから丁寧に指導して下さいました顧問の先生方、全国大会出場の際に多大な御支援をいただいた同窓会の方々、本当にありがとうございます。

清水 基彦

SPORTS

運動部

- ①県総合体育大会
- ②関東大会
- ③インターハイ予選
- ④全国高校総体
- ⑤国体
- ⑥県新人大会
- ⑦その他の大会

空手部

①団体組手

ベスト8

剣道部

- ①一回戦 高崎4-0前橋工業
- 2回戦 高崎3-2渋川高校
- 3回戦 高崎1-4前橋西

ベスト16

- ③一回戦 高崎5-0白根
- 2回戦 高崎1-4前橋

- ⑥一回戦 高崎5-0中之条
- 2回戦 高崎1-4樹徳

⑦県選手権大会

- 1回戦 高崎4-0前橋東
- 2回戦 高崎1-1前橋商業

(本数負け)

弓道部

- ①個人戦 2年・清水淳也

優勝

硬式野球部

⑦関東個人選手権県予選
2年・山中亨太

7位
関東大会出場

○春季関東地区高校野球大会県予選

- 1回戦 高崎9-8前橋西
- 2回戦 高崎4-3常磐
- 3回戦 高崎3-4桐生一

○全国高等学校野球選手権群馬大会

- 1回戦 高崎4-2前橋育英
- 2回戦 高崎3-10伊勢崎商

○秋季関東地区高校野球大会県予選

- 1回戦 高崎2-6前橋南

サッカー部

- ①4回戦 高崎0-2常磐
- ③4回戦 高崎1-2育英
- ⑤品川俊人 群馬県選抜として出場

1回戦敗退

- ⑥1月・2月実施
- ⑦全国高校選手権県大会

- 4回戦 高崎1-5育英

山岳部

- ①
- ⑥

柔道部

- ①団体 7位
- ①個人 2位

桜沢正己

バスケット部

- ①高崎51-74樹徳 3位
- ③高崎54-59高商 3位
- ⑥平成13年1月開催
- ⑦全国選抜大会県予選会 高崎59-88高商 2位

バレーボール

- ①ベスト8 3位
- ③池谷友宏出場 2回戦 優勝
- ⑦西毛地区大会 優勝
- ⑧県高校秋季大会 3位

ラグビー部

- ①予選 高崎43-5桐生 高崎66-10富岡
- 決勝トーナメント 準々 高崎21-57樹徳 5位
- ③予選リーグ 高崎12-5関学 高崎72-0前橋商業
- 決勝トーナメント 1回戦 高崎35-0高崎商業 準々 0-44前橋商業 5位
- ⑥1月-2月実施予定

陸上部

- ①八百m 中山陽右 4位
- 八百m 樋口好宏 6位
- 千五百m 中山陽右 5位
- 百十mH 北嶋将志 5位

4×四百mR (土屋・中山・樋口・稲垣) 5位

棒高跳 稲垣圭吾 1位

棒高跳 高田武蔵 4位

やり投 高田武蔵 6位

総合20点 6位

②千五百m 中山陽右 4位

棒高跳 稲垣圭吾 2位

④千五百m予選中山陽右 11位

棒高跳 稲垣圭吾 8位

⑤少年男子B八百m 中山拓紀 6位

少年男子共通 棒高跳 稲垣圭吾 予選

⑥四百m 樋口好宏 3位

八百m 樋口好宏 1位

中山拓紀 2位

瀧川聡史 5位

新井正典 8位

千五百m 中山拓紀 1位

高橋正皓 3位

瀧川聡史 5位

高橋正皓 4位

百十mH 樋口智幸 4位

五千m 北嶋将志 5位

四百mH 北嶋将志 1位

神戸悠希 8位

三千mSC 新井正典 4位

五千mW 柳沢健人 1位

新井隆太 2位

4×四百mR (樋口・中山・清水・北嶋) 5位

⑦関東選抜新人大会 樋口好宏 5位

千五百m 中山拓紀 1位

四百mH 北嶋将志 7位

五千mW 柳沢健人 6位

⑧群馬県選手権大会 樋口好宏 4位

八百m 中山陽右 5位

千五百m 中山拓紀 2位

五千mW 中山陽右 5位

4×四百mR 相川雄広 6位

(樋口・中山・土屋・稲垣) 4位

棒高跳 稲垣圭吾 2位

⑨関東選手権大会 棒高跳 稲垣圭吾 8位

棒高跳 稲垣圭吾 6位

⑩県高校駅伝競走大会 関東大会初出場

バトミントン同好会

①1回戦 高崎0-2伊勢崎工

③1回戦 高崎1-3富岡実業

⑥1回戦 高崎3-0渋川

2回戦 高崎0-3桐生

CULTURE

学芸部

囲碁部

⑪第24回全国高校囲碁選手権大会 団体戦

清水基彦・武井利浩・平良重弘

個人戦 堀米顕久

⑫第24回全国高校総合文化祭 団体戦 清水基彦・堀米顕久

将棋部

⑬第13回全国将棋竜王戦・県予選 準優勝 小坂橋卓哉

新聞部

⑭群馬県高校新聞コンクール (上毛新聞主催・県教育委員会協賛)

県教育委員会教育長賞受賞

⑮全国高校新聞コンクール (大東文化大学主催・朝日新聞社協賛)

奨励賞受賞

⑯全国高等学校文化連盟 第5回全国高校新聞コンクール

年間紙面審査賞入賞

⑰全国高等学校総合文化祭 群馬県代表 (開会式全般)

新聞部門県代表

マンドリン部

⑱平成11年度 群馬県マンドリンフェスティバル 奨励賞

百人一首同好会

⑲全国高文連総合文化祭 静岡大会 群馬県Aチーム代表

星野大輔 小鮎昭徳

星野大輔 小鮎昭徳

星野大輔 小鮎昭徳

星野大輔 小鮎昭徳

星野大輔 小鮎昭徳

星野大輔 小鮎昭徳

星野大輔 小鮎昭徳

星野大輔 小鮎昭徳

星野大輔 小鮎昭徳

星野大輔 小鮎昭徳

星野大輔 小鮎昭徳

第54回定期戦

先輩の作り上げてきた伝統を更に発展させ、今までのマンネリ化に終止符を打ちたい、それが私の信念であった。

高入学前に私は父が前高生であった頃の定期戦（二十六回）の話をいつも聞かされた。騎馬戦、駅前での特集、喉をからしめて叫んだ校歌。期待に胸ふくらませ高の校門をくぐりまず驚いたのは、定期戦に対する生徒の無関心さだった。これではいけないと思った。伝統行事定期戦を俺達の代で中興しなければという使命に駆られた。

—— 念じ行動すれば通ずるもの ——

今年の定期戦は今までと一味違った。綱引きの応援には、約四百人以上の高生が集まり、喉をからして応援したそれに応えるかの様に、十年振りの全学年ストリート勝ち、一本も前高に引かせなかった。定期戦もう一つの華玉入れも、応援団の引率で集結した高高大応援団の声援で圧勝に導いた。三年生勝利とともに、朋上げされ宙を舞うリーダーの姿が印象的だった。

全高生生の頑張りのもと、八年振りに一般対抗を勝ち越せた。

全員で団結して勝利を勝ち取るという定期戦の醍醐味を多くの人に体験してもらう機会作りにも携わることができて大変光栄に感じております。

定期戦の永遠の存続を祈って。

（第五十四回高前定期戦）

実行委員長 宮崎 吾一

進路状況（全日制）

（ ）内は現役

大学	年次	10年	11年	12年	大学	年次	10年	11年	12年
北大		8(5)	11(8)	6(4)	慶應大		67(55)	61(44)	75(55)
東北大		25(22)	15(10)	21(17)	早稲田大		68(57)	62(37)	67(49)
筑波大		2(2)	3(3)	7(6)	中央大		42(34)	51(41)	53(44)
千葉大		9(9)	13(10)	6(6)	明治大		40(33)	65(50)	55(39)
群馬大		28(25)	30(28)	24(20)	上智大		11(6)	4(1)	5(2)
(医)		8(6)	4(3)	8(6)	立教大		12(8)	12(12)	10(9)
埼玉大		6(5)	9(8)	2(2)	学習院大		4(4)	16(8)	6(2)
東京大		15(12)	14(8)	15(13)	青山学院大		24(22)	23(18)	19(6)
一橋大		5(5)	3(3)	7(6)	法政大		26(19)	35(24)	38(28)
東工大		6(5)	10(9)	11(9)	日本大		61(54)	43(35)	49(34)
横国大		6(6)	7(2)	8(6)	東京理科大		101(86)	105(84)	78(64)
新潟大		21(20)	22(20)	11(9)	芝浦工業大		21(21)	25(22)	20(15)
金沢大		4(4)	5(5)	3(3)	同志社大		6(1)	8(5)	9(5)
信州大		2(2)	3(3)	4(4)	立命館大		22(15)	23(16)	23(19)
名古屋大		2(1)	1(1)	4(1)					
京都大		1(0)	0(0)	3(2)	高経大		9(8)	7(6)	11(8)

第54回定期戦得点表

部対抗		種目	一般対抗	
高高	前高		高高	前高
		水泳	6	3
		駅伝	3	6
		綱引き	9	0
		玉入れ	6	3
		ソフトボール	6	3
0	6	卓球	3	6
6	0	陸上競技	6	3
0	6	ソフトテニス	0	9
0	6	バレーボール	5	4
6	0	バスケットボール	6	3
6	0	柔道		
0	6	剣道		
6	0	弓道		
0	6	空手道		
6	0	サッカー		
0	6	ラグビー		
0	6	硬式野球		
0	6	軟式野球		
6	0	硬式テニス		
36	48	小計	50	40
高高	86	総合	前高	88

人事異動

（平成12年度）

退職者

井出 存祐 通・教頭
若山 康 地歴
森 三樹夫 事務主査

転任者

外山 嘉男 事務部長→高崎女子高校
木村 高巳 英語→高崎女子高校
塚本 泰弘 保健体育→吉井高校
田中 雅徳 英語→渋川高校
大野 俊彦 数学→高崎女子高校
中野 憲一 国語→沼田高校
塩崎 猛雄 通・教頭→土屋文明記念館
櫻井 泰輔 地歴→高崎東高校
清水由佳里 専務主事→太田女子高校

転出者

御供 洋 事務部長→前橋高校
飯野 良二 英語→富高定時制教頭
箕輪 明 国語→渋川女子高校
水上 光久 数学→前橋女子高校
佐久間秀人 保健体育→高崎北高校
加藤 聡 英語→県事務局

高高同窓会 予算決算報告

平成11年度 経常会計 (平成11年1月1日～平成11年12月31日)			
収入の部			
費 目	平成11年度予算	平成11年度実収入	備 考
前年度からの繰越金	780,091	780,091	
入 会 金	2,800,000	2,995,000	全日制325人通信制35人
維持会費	7,000,000	5,996,000	2,077人
利 息	2,909	2,737	
雑 収 入	15,000	17,000	100周年記念ビデオ・ネクタイピン代等
合 計	10,598,000	9,790,828	

支出の部			
費 目	平成11年度予算	平成11年度実支出	備 考
会 議 費	1,000,000	1,052,629	平成11年度総会補助30万円他
祝 賀 費	550,000	533,060	ネクタイピン代・卒業証書九筒代等
選 別 費	300,000	236,000	平成11年転退職職員へ
慶 弔 費	200,000	75,737	争議花輪代等
通信印刷費	500,000	240,940	維持会費納入礼状、葉書代等
旅 費	100,000	64,000	京浜同窓会出席者等
会報発送費	2,000,000	1,819,186	
会報作成費	1,800,000	1,963,095	
事 務 費	700,000	764,705	人件費、事務用品代等
同窓会長賞費	150,000	92,746	文鎮代
補 助 費	600,000	600,000	図書館、翠樹体育会へ各30万円
特別会計積立	1,500,000	1,500,000	
雑 費	500,000	74,500	名簿代返金・翠樹育英会戻し等
予 備 費	698,000	84,356	翠樹会館内整理棚等
合 計	10,598,000	9,100,954	

平成12年度 同窓会経常会計予算 (平成12年1月1日～平成12年12月31日)			
収入の部			
費 目	平成12年度予算	平成11年度予算	
前年度からの繰越金	689,874	780,091	
入 会 金	2,920,000	2,800,000	
維持会費	6,000,000	7,000,000	
利 息	2,126	2,909	
雑 収 入	10,000	15,000	
合 計	9,622,000	10,598,000	

支出の部			
費 目	平成12年度予算	平成11年度予算	
会 議 費	1,000,000	1,000,000	
祝 賀 費	550,000	550,000	
選 別 費	300,000	300,000	
慶 弔 費	200,000	500,000	
通信印刷費	500,000	500,000	
旅 費	100,000	100,000	
会報発送費	2,000,000	2,000,000	
同窓会報費	1,800,000	2,000,000	
事 務 費	1,500,000	700,000	
同窓会長賞費	150,000	150,000	
補 助 費	600,000	600,000	
特別会計積立	0	1,500,000	
雑 費	300,000	500,000	
予 備 費	622,000	698,000	
合 計	9,622,000	10,596,000	

差引残高 689,874円
次年度への繰り越し 689,874円

特別会計積立

収入の部	前年度からの繰越金	1,500,000
	平成11年度通常会計より	1,500,000
	利息	2,400
	合 計	3,002,400
支出の部	なし	
差引残高	3,002,400円	

通常会計・特別会計積立金について上記の通り報告いたします。
群馬県高崎高等学校同窓会
会 計・・・御友 洋 飯野 良二 三浦 昭久

監査の結果、上記報告に誤りのないことを認めます。
群馬県高崎高等学校同窓会
監 査・・・石井 敬之助 安藤 慶太郎 松岡 光弘

高崎高校同窓会ゴルフ大会 会計報告

収 入	出場参加費 @17,000円×107名	1,819,000円
	キャンセル料	29,000円
	合 計	1,848,000円
支 出	ゴルフ場支払 @14,000円×107名	1,498,000円
	スズラン景品代	133,000円
	参加賞代	120,000円
	トロフィー代	23,000円
	通信費及印刷代	21,000円
	打ち合わせ会諸費	53,000円
	合 計	1,848,000円

※チャリティホール収入80,000円はそのまま翠樹育英会へ寄贈

編集後記

同窓の皆様は、多大なる御協力をいただき、会報第34号が発刊できました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。また今回は、同窓会編集部の不手際で、皆様への発送が大幅に遅れてしまいましたことをお詫びいたします。

御多忙の中、貴重な原稿やお写真をお寄せ下さいまして、まことにありがとうございました。

(本部幹事会)

第99回高高同窓会新年総会のご案内

同窓生の皆さまには、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。21世紀最初の新年総会は、私達70期が担当させていただきます。新世紀の幕開けにふさわしい新年総会となりますよう、諸先輩のご指導、ご助言を仰ぎながら準備を進めてまいります。

懇親会におきましても一工夫をこらしておりますのでご期待を。

期日 平成十三年一月二十七日(土)
時間 午後三時より
場所 高崎ビューホテル
会費 五千元
(当番期70期代表 熊倉 清明)

同窓の方々、先輩後輩の方々、お誘い合わせのうえ、一人でも多くの同窓生の皆さまのご出席を心よりお待ちしております。